

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	社会福祉法人栄光会からすたろうの学び家			
○保護者評価実施期間	令和8年2月3日	～	令和8年2月9日	
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	19	(回答者数)	15
○従業者評価実施期間	令和8年2月3日	～	令和8年2月9日	
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7	(回答者数)	7
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年2月21日			

## ○分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	アンケートで「事業所が公表している支援プログラムは、事業所の提供する支援内容と合っていると思いますか」に、保護者全員が「はい」と回答されている。 このことから「何を支援してくれるのか」が明確で、有言実行の支援内容が、当事業所の誇れる強みと考える。	・公表しているプログラムが、個々の「個別支援計画」にどう落とし込まれているかを、面談時に紐付けて説明している。 ・日々の連絡帳や活動報告（SNS、ブログ、掲示板）において言葉だけでなく、実際の活動写真を添えて報告することで、プログラムが実行されていることを日常的に提示している。	支援プログラムによって、お子様のどの能力がどう伸びたかを数値やグラフ、比較写真などで具体的に示し（ビデオアフターの可視化）アセスメント指標共有の取り組みを目指したい。
2	アンケートで「子どものことを十分理解し、子どもと保護者のニーズや課題が客観的に分析された上で、放課後等デイサービス計画（個別支援計画）が作成されていると思いますか」に、保護者全員が「はい」と回答されている。 このことから計画案を作成する前に、目標の方向性についてあらかじめ相談し、共に作り上げる姿勢が、プロセスの透明化となり強みと考える。	・担当者（児発管）一人だけでなく、活動に関わる全スタッフからの意見を集約し、多角的な視点で子どもを捉えている。	・現在の課題解決だけでなく、数年後の進路や自立を見据えたストーリーを計画に盛り込み、将来ビジョンを見据えた計画を作成していきたい。
3	アンケートで「定期的に通信やホームページ・SNS等で、活動概要や行事予定、連絡体制等の情報や業務に関する自己評価の結果を子どもや保護者に対して発信されていますか」に保護者全員が「はい」と回答されている。 このことから定期的かつ多角的な発信や「わからない」というストレスの解消等が信頼や支援への納得感に繋がっているかもしれないと捉え強みと考える。	・文章を短くし、写真を多用することで、パッと見て「楽しそう」「安心」と感じられる構成にしている。 ・情報を詰め込みすぎず、エッセンスを絞って定期的に配信することで、閲覧の習慣化を促している。	・「保護者の声」コーナーとして、実際に支援を受けて感じたお父さまの変化や、家庭でのエピソードを保護者から募集し、匿名で通信やSNSに掲載できたらよい。 ・職員がなぜこの仕事をしているのか、どんな想いで子供たちと接しているかのインタビューを掲載し、人間味（パーソナリティ）を伝えられたらよい。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	保護者アンケートで「父母の会の活動の支援や、保護者会等の開催等により、保護者同士の交流の機会が設けられるなど、家族への支援がされているか。また、きょうだい向けのイベントの開催等により、きょうだい同士の交流の機会が設けられるなど、きょうだいへの支援がされていますか」で「はい」が9「どちらともいえない」が2「いいえ」が3「わからない」が1という回答だった。 これは、事業所が提供する交流機会が、全家庭にとって参加しやすい形式・内容になっていないことを示唆している。	平日の日中開催など、仕事を持つ保護者が物理的に参加できず、「機会を与えられていない」と認識されているかもしれない。	全員集まる大規模な会ではなく、「就学検討中」「思春期の悩み」「偏食対策」など、テーマに絞った少人数の会を、考えていきたい。

2	<p>保護者アンケートで「事業所の活動プログラムが固定化されないよう工夫されていると思いますか」の問いで「はい」が1「どちらでもない」が1、「いいえ」が0、「わからない」が3という回答だった。</p> <p>このことから、提供側の創意工夫が自己完結してしまっていることが伺われる。</p>	<p>質問の意図にもよるが、当事業所としては、繰り返しの大切さを重んじている。発達段階の支援のプロセスにおいて、繰り返し行うことで、螺旋状に成長していくと考える。そのため、固定化と捉えるのか、繰り返すことで、発達段階の成長の土台が積み上げられていくと捉えるのかで、意味が変わってくると考える。そのため、プログラムの意図（ねらい）の言語化と発信の不足が課題である。</p>	<p>半年前と現在のスケジュールや活動内容を並べて掲示し、「お子様の成長に合わせて、ここまで活動の幅が広がりました」と進化のプロセスを視覚化できるように努力したい。</p>
3	<p>保護者アンケートで「放課後児童クラブや児童館との交流や、地域の他の子どもと活動する機会がありますか」の問いに、「はい」が1「どちらでもない」が3「いいえ」が0「わからない」が1という回答だった。</p> <p>従業者アンケートでも「はい」が4「どちらでもない」が2、「いいえ」が1、無回答が1だった。</p> <p>質問に「放課後児童クラブ」「地域の他の子ども」と表記されていることで、特定されてしまっているのかもしれない。</p>	<p>実際は、事業所の施設内に、「児童発達支援」「放課後等デイサービス」以外に「子ども第三の居場所」事業の子どもたちも活用しているため、日々、別事業の子どもたちとの交流が行われている状況ではある。ただ、同じ敷地内の同じ施設を利用しているため、一つのグループと保護者や従業員ですら、そう感じているのかもしれない。</p> <p>また、地域の図書館イベントに参加したり、ミュージックフェスの参加も実施し、今年は感染症の増加のためキャンセルになったが、地域の高齢者施設との交流も予定されていた。このように、幅広く活動していることを認識してもらう手立てが必要だ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「何をすれば地域交流になるのか」という定義の曖昧さを具体的な目標として提示する。</li> <li>・地域の子供が参加する「オープンイベント」の参加も考えていく。（休日以外の営業日で）</li> </ul>